

盆踊りも様が変わり

盆踊りも様が変わり 札幌の夏は短い。その短い夏は踊りで始まり踊りで終わる。はじまりを告げる踊りは「よさこいソーラン」。終りの踊りが「盆おどり」である。昔の札幌では春と夏の区切りを、六月十五日神宮のお祭りに決めていた。この日は全道の官庁や会社も休日になり、翌日から学校の制服もすっきりと夏服に変わった。

今はこの例大祭よりおよそ一週間早く始まるよさこいソーランのあの威勢の良い踊りと声と衣装とが、いかにも夏の到来を告げているようだ。たぶんこの期間中は札幌が一年で一番大声を出しているんじゃないだろうか。

これに比べると、夏の終りの盆踊りは、いくら強く太鼓を響かせても、浴衣の裾に秋風がしのび込んで来るような気配があって、どこか寂しい。盆踊りそのものが元々は亡きご先祖の霊をなぐさめるためのものだから、どこかにさびしさがこもるのは当たり前とも云えるのだが。

しかし、盆踊りが札幌の一年間のうちで一番にぎやかだった時代もあったのだ。戦後数年たって、ようやく、戦火のおびえはなくなったものの、まだ食べ物も潤沢とはいえず、今の若者には想像できない貧しさが社会全体をおおっていた昭和二十四・五年頃のことだ。市内あちこちにびっくりするほどの数のやぐらが立ち、太鼓と歌が夜空に飛び交い、踊り手が何重もの輪をつくり、それをぎっしりと観衆が取り巻き、通り抜けるのもやつとという様子が市内至るところで見られた。

今は小学校グラウンドや児童公園などの広場を使って、町内会などが、少々おざなりの子供向けの踊りの音楽を流していたりしているが、その当時は道路を占領してやぐらを組み、肉声で北海盆歌をうたい、樽太鼓に合わせる、いわば本物。叩き手がうまければ踊りの手も揃い「それからどーした」という合の手も揃った。

男は派手な女物のゆかたにたすきをかけて腕まくり、尻をはしょって厚化粧と、いでたちも奇妙で、市内の会場をあちこちめぐって歩いた。思えば、戦後の荒廃の中の、どこかやけっぱちな盆踊りだったような気もする。